



## ヒロシマとは何か (上)

長瀬 隆  
(作家)

ヒロシマについて書かれている思想的、文学的な文献はすでに多大である。しかしながらそのなかからもっとも重要にしてかつ根源的なものを一つだけ選ぶとすれば、それは大江健三郎の『ヒロシマ・ノート』(1963-4)でもなければ井伏鱒二の『黒い雨』(1965-4)でもない。それは日本人によって書かれたものではない。私の考えでは、それはベトナム生まれのフランスの女流マルグリット・デュラス(1914-)の映画のためのシナリオ『ヒロシマわが愛』(1959 筑摩文庫に翻訳あり)なのである。

彼女はアウシュビッツを描いた優れた記録映画『夜と霧』の映画監督レネにしたがってヒロシマを主題としたシナリオを書くべく1958年来日した。

かくて広島に滞在し、原爆資料館には三度足を運び、原爆病院を訪ね、『原爆の子』を初めとする関連するすべてのフィルムと資料を見た。その結果後に彼女が記しているところによれば「ヒロシマについて語るということは、それについて語ることは不可能であるということ語ることである」という結論に到達した。

彼女は「原爆を悲惨として描くことは日本人にまかせよう」と考え、広島における一組の男女の行きずりの恋の物語を作った。平和を主題とした映画の撮影のために来広したフランス人女優が、その仕事が終わり、明日は帰国するという日の前日に広島の日本人男性と性的に結ばれるという物語であった。(ここから日本で上映されたときの『二四時間の

情事』という俗悪なタイトルの訳が生まれた)

映画は最初の情事が行われた翌朝のホテルの一室から始まる。ヒロシマの男性は彼女に広島に留まってくれるよう頼む。せめてもう一日というわけであった。しかし二人はそれぞれ配偶者のいる人々なのである。

フランス人女性が広島で恋におちたのは、原爆を知ったことの衝撃のためなのである。彼女は広島で原爆を見た(知った)と思う。しかし原爆を見る(知る)ことは不可能なのである。それを見知っているものから見るならば、旅行者のヒロシマ理解などというものは底の浅いものであって、デュラスは「君はなにも見なかった」という声を広島の虚空に聞かないではおれなかった。そして作品の女性はその声に引き留められ、その言葉の意味を知るべく、日本人の男性を受け入れたのである。

大江健三郎は『ノート』のなかで「広島は人類全体のもっとも鋭く露出した傷のようなものである」と述べているが、デュラスはそれよりも六年前にまさにそのように実感し、それを表現したのだった。

1964年に大江がそのように記したのは、原爆の被害がまさにそのようなものであったがためである。しかし彼が『ノート』を書くためにはその事実だけでは不十分だったのである。彼が告白し、今日では非常によく知られているように、このとき同時に彼の最初の子息が脳に障害をもって生まれていて、彼がそのことに驚愕し打ちのめさされていて、彼がその悲運を引き受けて闘う必要に迫られていた

からであった。そのことが被爆者の理解を深めたのであり、彼はその「個人的な体験」からヒロシマを把握し、『ノート』を書きえたのであった。

それと同様にデュラスは女主人公のヒロシマへの理解と共感の根底にあったものとして、女性のフランスでの過去を明らかにする。戦時下で十八歳であった彼女は占領軍のドイツ兵と恋におち、情事にふけた。そして「解放」後にドイツ兵は射殺され、彼女は髪を刈られ、町中を引きずりまわされ、故郷の町にはおれなくなって、パリに送り出された。その到着の朝、新聞のトップ記事に広島への原爆投下が報じられていたのだった。

広島で彼女は己の過去の傷痕を思い出す。そして常にヒロシマの痛みとともに生きることによって、個人的な傷を忘却に委ねようと決意し、またそれが可能となったことを知るのだった。

デュラスが大江がそうであるように、私は広島もしくは長崎の生まれ育ちではない。私は樺太に生まれ育ち、ソ連占領下で暮し、十五歳の年に引き揚げた。大学ではロシア文学科に進んだ。師事した先生に平和運動家であった人がおり、その人との縁で1957年に日本原水協の訪ソ使節団に加わることになり、この時に初めて被爆者である人々に出会った。

『ヒロシマわが愛』という作品の存在を知ったのは、その二年後ブタベストにおいてであった。国際学連の英文の機関誌で岡田英治とエマニエル・リヴァのスチール写真の載った紹介記事を読んだのであった。私はその二週間後に東京の小さな映画館で、封切られていたその映画を見て感銘をうけた。私はその翌日に西下し、初めての広島で原爆資料館を訪ね、大分市に至り、現在の家内に求婚したのだった。彼女は広島で1.3 キロの地点で被

爆しており、この時期大分市に住み、県被団協の事務局長をしていた。私たちは平和運動にかかわってこの年ヨーロッパへの旅を共にし、帰国していた。

結婚後1962年に最初の子が生まれたが、その子は心臓に欠陥があった。ファロー四徴症の二つをもつ重症のものであり、満四歳になった時点で手術が予定されていた。そのような状態で、商社でソ連貿易の担当者として勤務しつつ、私は大江の一連のヒロシマにかかわるルポルタージュを読むこととなった。1963年に雑誌『世界』で読み、翌年岩波新書に収められて読んだ。その作品はそれ以前から読んでおり、その後も多く読んできている。そして今日しばらくぶりで『ノート』を読みなおした。そしてこの作家がその出発いらいずっとマルクス主義者ではないことを繰り返かえして表明してきたことについて考えざるをえなかった。

大江とは異なってデュラスはマルクス主義を標榜する人である。彼女は戦中のレジスタンスからフランス共産党に入り、1950年にスターリン主義に抗して除名されている。以来彼女は共産党とソ連にはきびしく対決してきた。共産党のマルクス主義にたいしては「すでに死体硬直を起こしている」とまで言い切っていた。ところがそれを予見していた観のあるソ連の崩壊が現実には生じた後には、一転してマルクス主義の擁護の姿勢を示している。彼女はいまや死語と化した観のあるプロレタリアートという言葉を生き生きと語っている今日では稀なる作家のひとりなのである。最近のインタビューで彼女は述べている。「私は七年間共産党員でした。魂はいまでも共産主義者です」「共産主義のうちで成功したものは何ひとつありません。全体的な殺人のようなものでした。・・現在それが不可能だとい

うことはみんな知っています。でも共産主義の思想は、その夢はいまもここにあります」

大江は共産党員であったことはなく、マルクス主義か実存主義かということでは、実存主義者として出発した。そしてそれは国際的にはスターリン批判があり、日本でもとくに学生運動のなかでそれに呼応する動きのあった年に当たっているのである。つまり共産主義者同盟その他が結成された時期に彼は登場しており、1958年には記している。「ぼくが全学連の指導者に会いたいと考えはじめたのはこの事件(1958年の6月1日の日共本部でのこと)が契機になった。それにぼくも三十万の学生の一人として全学連に属している。そこでぼくは全学連の委員長と委員、二人とも共産党から除名された点で、勇敢に身をもって全学連の中央執行委員会の独自性を主張した二人にあつたのである」「香山健一氏と森田実氏はじつにすばらしい青年であつた。ぼくは彼らとおなじ学校の学生であるこ

とを誇りにしていいと思う」「これは明らかに予測できることであるが、十年後日本の革新政党のリード・オフ・マンは全学連の執行委員会で育つた鋭い頭と逞しい行動力の若者達に握られるであろう」(「叫ぶ全学連とふるえる学生」、雑誌「文芸春秋」)。大江はこの文章をその後の評論集に収録していないが、まさにそれゆえに注目されねばならない。

大江は「ふるえる学生」の立場でこの文章を書いた。そしてそれは後に『ヒロシマ・ノート』に連なり、反核の論客になってゆく立場でもあつた。そしてここで思い出されるのは、この時期「叫ぶ全学連」(つまり共産同)の「反ソ・反スターリン主義」を支持していた吉本隆明がいたことである。そしてその立場はヒロシマの軽視と表裏をなしていたのであつて、この評論家は八十年代に入って反核に異論を唱えて論陣をはることとなつた。

<次号完結>(1994年11月1日)

<平和事務所主催>

### 丸木美術館、ミニツアーのご案内

平和事務所では下記の通り「原爆の図」が常設展示されている丸木美術館へのミニツアーを計画いたしました。今年は被爆50周年、いま再び核問題考え直す機会になればと思いこの企画を致しました。ハイキング気分で気軽にご参加下さい。どなたでも参加出来ます。

<記>

- ☆ 日 時 1995年1月15日(日)
- ☆ 場 所 丸木美術館(埼玉県東松山市下唐子1401 ☎0493-22-3266)
- ☆ 集 合 東武東上線、東松山駅改札口前 午前11時30分  
(池袋発10時の急行が便利です。約1時間です)
- ☆ 費 用 なし(但し交通費、入館料などは各自でお支払い下さい)
- ☆ 連絡先 03-3334-9732(吉田まで)



## ヒロシマとは何か (下)

長瀬 隆  
(作家)

先天的な心臓の奇形で生まれた私の最初の子は1967年2月に四歳十一月で死亡した。

私はその後三年間中国を担当し、1970年に再びソ連担当に戻った。そしてその年から家内との出会いであった1959年夏の外国の旅を書こうと努めることとなった。ところがその頃から引揚後たえて会うことのなかった樺太での友人知己との再会が重なることとなったのである。私の関心は久しく忘却にゆだねられていた樺太に向かうことになり、1984年に『樺太よ遠く孤独な』という本を書いた。ところがその原稿が仕上がると同時に、家内が二度目の乳癌で手術によって両乳房を失った。また左腎臓が癌におかされていて手術をうけ、年末には人工透析の生活にはいった。特別被爆者手帳の持主であった彼女はこれにより一級の身体障害者の手帳をも所有する者ともなったのである。また1985年には癌が転移したと告げられ、私は彼女の死を確実視した。

誤診であったことが明らかになり、ことなきをえたのであるが、これはものを書くうえでは有効に作用した。私は書こうとつとめつつ難渋してきた1959年の出来事を『ヒロシマまでの長い道』という表題で書くことをえた。ところがそれを終えた直後に早大で師事した松尾隆教授のドストエフスキー関連の未完未整理の原稿が発見され、その処理に没頭することとなった。一年を要してそれがペレヴェルゼフの『ドストエフスキーの創造』の翻訳であることを発見し、最初から翻訳しなおした。そしてそれは作品と前後して1989年に刊行された。

家内はこの間に1988年5月には透析後の血圧の降下がはなはだしくなって、一人ではその専門のクリニックに通院できない状態になった。かくて私はまだ定年には年数があったのであるが、持家を売り、クリニックに近いマンションに移った。

私は1957年以来殆ど毎年ソ連に行き来して生活してきた。しかし家内の状態が悪化してからは日本国内でさえ、三日とは家を留守にすることができなかった。かつその状態は家内が死亡するまで続くと観念していた。ところが1991年から新しく開発された薬が投与され、これが効果があって彼女の状態が上向いて来た。帰路はヘルパーさんにたよらなければならなかったが、往路はひとり歩いてゆけるようになったのである。かくて私は1991年5月には吉田嘉清にしたがってバルト三国に行った。また足を延ばして広島大原医研の佐藤幸男教授らとベルリンとチェルノブイリを訪ねた。

長くソ連にかかわって生活してきた私は1984年に樺太の本を書く段階でソ連の崩壊を願うに至っていた。樺太の主題はそこまで至って初めて書けることになったのであった。また私のヒロシマにかかわっての個人的な体験の物語は、その樺太が書けたので書けることになったものなのである。

大江健三郎はまことに賢明かつ幸運にも左翼運動に加担しないですんだ。その文学的成功はもちろん才能によるが、また多大にそのことにも負っているのである。しかしマルクス主義者であった人に師事し、共産党に属し

たことのある私の場合には、そのことを視野の外において、己のヒロシマを語ることはできなかった。なぜならば私は1959年に共産党からの離党を決意すると同時に被爆者の家内への結婚を決意していたのである。それが書けるようになるためには、私は1985年吉田嘉清が共産党を追われるのを待たねばならなかったのであった。

大江は『ノート』の結びにおいて「《被爆者の同志》であるよりほかに正気な人間としての生きようはない」「正統的な原爆後の日本人とみなす人々に連帯したい」と記している。私は結婚して五年してこれを見たのであるが、我が意をえたと思ったものだった。しかし結婚の結果私の人生で何が生じ、また人生がどのようなものになったかを私は知っている。1984年以来、わけても1988年以来私は彼女のおかげで苦難の生活をよぎなくされて生きてきた。それがもしも原爆のためであるとするならば（もちろんそれを証明する手ではない）、私は原爆が何であるかを十分に知った。なにしろ彼女には二十回は死んでもらいたいと思って生きてきたのである。

どうにか持ちこたえることができたのは、私に先天的な病異変をもって生まれ、四歳十一月で逝った子があったからである。私はその子に命じられまた励まされて、彼女を救ったのであった。そのことに思い当たり、夫婦の三十余年の歴史を記すことになり、二年をようして最近私は『微笑の沈黙』六八七枚を書き終えた。

この先は1956年に四十九歳で逝った松尾隆教授について書こうと考えている。戦後精力的に平和運動に従事し、原水爆禁止運動の前史を作った人であった。その運動の成立は教授の晩年の出来事であったが、それを「日本の（パリ・）コミュニケーションですのう」と生地

長崎県島原の方言で語り、それに多大の期待を寄せていたのである。

島原半島の南端の高来町の真宗の寺の出身である。現在は甥の血筋にあたる人が住職であり、南国的な植物の茂る広い庭の一角にはその人によって建立された立派な親鸞の銅像が立っている。そしてそこからは1937-8年にキリシタンがたてこもり、最後は玉砕して果てた原城跡の岡が望まれるのである。また寺の裏山は今日では公園となっているが、日本で最初のセミナリオが置かれた場所と伝えられている場所である。一帯は老若男女のすべてが乱によって死に絶え、乱の後にはまったくの無人の土地となったところである。つまり今日の住人のすべては乱の後に移住してきた人々の子孫なのである。真蔵寺は柳川立花藩から出ていた。

幕府は仏教の場合でも一つの宗派が強くなることを警戒し、各宗派の寺を一つづつ置いたという。それらの寺の僧侶たちは毎年乱の終焉の日には集まって合同で原城跡で読経をおこなっている。

当時好んで移住したいと思ったものはいなかった。かくて幕府は西日本の諸藩に人を送るよう命じ、それらの藩は囚人を送ったと伝えられている。土地の人たちは寺の住職の一族以外は囚人の子孫であると認識している。

たとえば半島の一帯は九州では例外的に素麺の生産がさかんであるが、それは讃岐の小豆島からの移住者が伝えたものとのことだった。

松尾教授はそのような土地に生まれて育ち早大に進み、ドストエフスキー研究者となりマルクス主義者となった人だった。没後三十年たった1986年にかなりの量の遺稿が発見されており、私としてはその処理をしなければならず、そのためにはその人について書かね

ばならないのである。差しあたってはペレヴェルゼフの『ドストエフスキーの創造』を訳しつつ、どうして途中で放棄したかという問題について私は書かねばならない。

今日私における「ヒロシマとは何か」を形成しているのはこの問題なのである。〈完〉  
(1994年11月1日)

## 平和と生命への諸宗教合同巡礼／中国・韓国巡礼の趣旨と参加のお願い



日本山妙法寺

来たる1995年、第二次世界大戦が終了して50周年を迎えるに当たり、日本山妙法寺はポーランドのアウシュビッツから広島までの諸宗教合同巡礼を、1994年12月1日より開始いたしました。私達はまず自から巡礼者となって、大戦の惨劇の地を訪れ、あるいは今日なお戦火の絶えない国々を巡ってその犠牲となった方々への慰霊と反省と懺悔の祈りを捧げたいと思うものであります。

第二次世界大戦に敗れた日本は、自らの犠牲3百万、他の国々の犠牲は2千万ともいわれる大過を招いたその本当の原因に思いを馳せること無く、今日50歳になろうとしています。戦後生まれの多くの日本人が義務教育の中で、日本はなすべき事をしてきたという歴史を学んでいないという事実が、その状況を雄弁に物語っております。

敗戦50年を契機として、私達はこの巡礼を通じて真実を学びたいと思ひ立ち、平和への道を踏み開けたいと念ずるゆえに、自らの非力を顧みず、宗教、宗派、無宗教、人種、国籍の枠を越えてこの巡礼を提唱する所以であります。皆様の御参加をお願い致します。

### 中国・韓国日程表

- 1995年5月31日 上海集合
- 6月 1日 上海市内及び日本山先師御法難地を行進。
- 2日 上海曹楊公園より安亭まで。
- 3日 昆山市。
- 4日 唯亭。
- 5日 蘇州。
- 6日 休息日。寒山寺訪問。
- 7日 望亭。
- 8日 無錫。
- 9日 横林鎮。
- 10日 常州市。
- 11日 齊牛鎮。
- 12日 小河。(孟河)
- 13日 碑城。
- 14日 凍壁鎮。
- 15日 鎮江市。
- 16日 休息日。
- 17日 下屬。
- 18日 栖霞鎮。
- 19日 南京、太平門に至る。
- 20日 南京市内、侵華日軍南京大虐殺遭難同胞記念館まで行進。
- 21日 記念館前にて、御断食慰霊祈念。
- 22日 南京「平和と友好への道」集会。  
(予定) 御断食祈念。